

公立 A 中学校の 4 年間にわたる社会性と情動の学習 「SEL-8S プログラム」の実践 —アンカーポイント植え込み法の観点からの検討—¹

Implementing Social and Emotional Learning of Eight Abilities at School
(SEL-8S) program at a public junior high school for four years:
A case study from the view point of Anchor Point Planting

小 泉 令 三

Reizo KOIZUMI
教職実践ユニット

(令和元年 9 月 30 日 受付, 令和元年 12 月 12 日 受理)

要 約

ある公立中学校で社会性と情動の学習「SEL-8S プログラム」を 4 年間にわたって実践した結果, 生徒指導上の問題行動が改善し学業成績が向上したという実践について, アンカーポイント (AP) 植え込み法の観点からの考察を行った。その結果, 学校というシステムでの SEL プログラムの実施と持続のための AP として, (1) 実施の形態, (2) 管理職のリーダーシップ, (3) コーディネーター的教員 (推進役教員), (4) SEL プログラムの選定と構成, (5) 学級・学年単位の試行, (6) カリキュラム構成と評価, (7) 取組の体制 (組織作り), (8) 教職員研修, (9) 環境づくり, (10) 家庭との連携を確認することができた。

キーワード: 社会性と情動の学習, プログラムの実施と持続, アンカーポイント植え込み法

目的と主要概念等の説明

本研究の目的は, 公立 A 中学校での 4 年間にわたる社会性と情動の学習「SEL-8S プログラム」の実践を, アンカーポイント植え込み法の観点から考察し, 他校での同種学習プログラムの実践と継続のための資料を提供することである。

まず, 社会性と情動の学習 (social and emotional learning, 以下 SEL) とは, 「情動 (感情) の理解と管理, 積極的な目標設定と達成, 他者への思いやりと表出, 好ましい関係づくりと維持, 責任ある意思決定について, 子どもおよび成人がこれらを実践するための知識, 態度, スキルを身につけて効

果的に利用できるようになる過程」(Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning, 2012)と説明されている。わが国ではより簡潔に, 「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした, 対人関係に関するスキル, 態度, 価値観を育てる学習」(小泉, 2011)といった説明もされている。SEL は特定の学習・教授方法を指すのではなく, 枠組みあるいはプラットフォームといった位置づけであり, SEL のための多数の学習プログラムが開発・実践されている。

A 中学校で実施した SEL-8S (Social and Emotional Learning of Eight Abilities at School) プログラムは, これらの多数の SEL プログラムの中の一つの特定プログラムで, 表 1 に示す 8 つの社会的能力の育成をめざしている。これらは, 大きく 5 つの基礎的社会的能力と 3 つの応用的社会的能力に分けられる。実践にあたっては, これ

¹ 本研究をまとめるにあたり, 貴重な実践資料を提供くださった A 中学校の校長先生及び教職員の方々には大変お世話になりました。深謝いたします。

表1 SEL-8S プログラムで育成を図る社会的能力

	能力	説明
基礎的社会的能力	自己への気づき	自分の感情に気づき、また自己の能力について現実的で根拠のある評価をする力
	他者への気づき	他者の感情を理解し、他者の立場に立つことができるとともに、多様な人がいることを認め、良好な関係をもつことができる力
	自己のコントロール	物事を適切に処理できるように情動をコントロールし、挫折や失敗を乗り越え、また妥協による一時的な満足にとどまることなく、目標を達成できるように一生懸命取り組む力
	対人関係	周囲の人との関係において情動を効果的に処理し、協力的で、必要ならば援助を得られるような健全で価値のある関係を築き、維持する力。ただし、悪い誘いは断り、意見が衝突しても解決策を探ることができるようにする力
	責任ある意思決定	関連する全ての要因と、いろいろな選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮し、意思決定を行う。その際に、他者を尊重し、自己の決定については責任をもつ力
応用的社会的能力	生活上の問題防止のスキル	アルコール・タバコ・薬物乱用防止、病気とけがの予防、性教育の成果を含めた健全な家庭生活、身体活動プログラムを取り入れた運動の習慣化、暴力やけんかの回避、精神衛生の促進などに必要なスキル
	人生の重要事態に対処する能力	中学校・高校進学への対処、緊張緩和や葛藤解消の方法、支援を求め方（サポート源の知識、アクセス方法）、家族内の大きな問題（例：両親の離婚や別居）や死別への対処などに関するスキル
	積極的、貢献的な奉仕活動	ボランティア精神の保持と育成、ボランティア活動（学級内、異学年間、地域社会での活動）への意欲と実践力

出所：小泉（2011）を一部改変

表2 8つの社会的能力と学習領域の関係および各領域の主テーマ（中学校）

学習領域		A	B	C	D	E	F	G	H
		基本的生活習慣	自己・他者への気づき、聞く	伝える	関係づくり	ストレスマネジメント	問題防止	進路	ボランティア
社会的能力	自己への気づき	○	○		○	○		○	
	他者への気づき	○	○		○				○
	自己のコントロール		○	○		○	○		
	対人関係	○	○	○	○				
	責任ある意思決定			○			○	○	
応用的	生活上の問題防止のスキル						○		
	人生の重要事態に対処する能力							○	
	積極的、貢献的な奉仕活動								○
各学習領域の主テーマ		・あいさつ ・規範遵守 ・時間管理 ・整理整頓 ・金銭管理	・自己理解 ・他者理解	・感情伝達 ・意思伝達 ・非言語による伝達	・協力関係 ・問題解決 ・携帯電話	・ストレス認知 ・ストレス対処 ・サポート希求	・万引き防止 ・喫煙防止 ・精神衛生 ・薬物乱用防止 ・性教育 ・健康教育	・自己理解 ・進路選択 ・進路決定	・学校でのボランティア ・地域でのボランティア

出所：小泉・山田（2011）（注）○は各学習領域において育成を図る主要な社会的能力を表す。

らの能力を育てるために、基本的生活習慣～ボランティアの8つの学習領域に、中学1～3年生の各学年用に12回ずつの学習指導案が提案されている（表2）（小泉・山田，2011）。各学校では、これらの学習を自校の教育課程の中に組み込んで実践する。

次に、本論で考察の観点となるアンカーポイント植え込み法（Anchor Point Planting）（Koizumi, 2000）について説明する。アンカーポイント（anchor point, 以下AP）とは、「人間とその環境との間の相互交流（すなわち相互作用によって双方が変化していくこと）を促進するような人

間－環境システム内の要素」と定義されている。APという概念は、環境心理学において、入学、卒業、就職のような環境変化を経験する環境移行事態での適応援助で活用できる。

高校入学を例にとると、事前の知識（例：“高校では単位を取らないと進級できない”）やスキル（例：新しい交友関係を築くためのコミュニケーションスキル）、そして家族（例：生活の基盤、心の拠りどころ）、友人（例：中学時代からの級友）、施設（例：拠点としての自分の教室）、組織（例：新しく所属する部やサークル）などが該当する。これらのAPを起点として、新しい高

表 3 A 中学校校の生徒指導上の諸問題及び学業成績等の変化

	平成 27 年度 (2015 年度)	平成 28 年度 (2016 年度)	平成 29 年度 (2017 年度)	平成 30 年度 (2018 年度)
問題行動発生件数 (件)	153	112	107	47
不登校 ^a (人, %)	34 (5.4)	22 (3.6)	21 (3.5)	18 (3.3)
暴力行為 (件)	0	1	0	7 ^b
いじめ認知件数 (件)	6	2	3	2
全国学力学習状況調査の B 県平均との差の合計 (点) ^c	3.2	0.5	11.0	21.0
全国学力学習状況調査の無答率/全国平均 (全国平均に対する割合, %) ^d	4.5/6.0 (75.0)	5.1/6.9 (73.9)	2.4/6.1 (39.3)	2.1/5.5 (38.2)

^a 欠席が 30 日以上の子生徒数で、病気欠席は除く。

^b 対等な関係 (仲が良い関係) で、小さなトラブルから単発の暴力になったケースが 6 件。特別支援学級の子生徒が、感情が抑制できずに器物損壊になったケース 1 件

^c 国語と数学の A 問題および B 問題のそれぞれの B 県平均との差の合計

^d 国語と数学の A 問題および B 問題の無答率の平均及びカッコ内はその割合

校が本人にとって意味のある生活環境として構造化されていくことになる。

AP は、その機能の面で 3 つの分類方法がある。第 1 は適応・不適応の観点から、正の AP (例: 高校での学校生活を支えてくれる友人) と負の AP (例: 反社会的勢力に導こうとする同級生) に分けられる。第 2 の分類方法は時間的順序に関するもので、まず第 1 次 AP (例: 隣の席の級友)、次に第 2 次 AP (例: 学校生活が進んで親しくなった友人)、さらに第 3 次 AP (例: しばらくして入部したクラブの同級生) と呼ぶ。そして、第 3 の分類方法はその重要性にもとづくもので、順にプライマリー AP (例: 進路決定に大きく影響し、卒業後も意見を仰ぐことがある恩師)、セカンダリー AP (例: クラス内の親友) となる。適応援助の観点から、積極的に正の AP を提供することが、AP 植え込み法である。

本論文では、以上のような個人にとっての周囲の環境の構造化の手法を、学校などの組織の中に新しい取組を取り込んで定着させる過程に適用することを試みる。すなわち、学校というシステムの中で SEL プログラムの実施と持続を図る際に、AP 植え込み法の考えを用いてその手続きや着眼点を整理するとともに、今後の取組への示唆を検討する。

従来、学校というシステムでの SEL プログラムの実施と持続のための AP としては、(1) 実施の形態、(2) 管理職のリーダーシップ、(3) コーディネーター的教員 (推進役教員)、(4) SEL プログラムの選定と構成、(5) 学級・学年単位の試行、(6) カリキュラム構成と評価、(7) 取組の体制 (組織作り)、(8) 教職員研修、(9) 環境づくり、(10) 家庭との連携の 10 項目が提案されている (小泉、2016)。次項で、AP ごとに具体的な内容と A 中学校の 4 年間の変化について説明を行う。

A 中学校の実践

学校の概要

A 中学校のある自治体は大都市部の周辺に位置し、工業および商業が地域の中心産業である。A 中学校の子生徒数は、600 人台から 500 人台に減少傾向にある。平成 30 (2018) 年でいえば、普通学級が 15 学級で特別支援学級が 2 学級である。

実践の成果

平成 27 (2015) 年度の C 校長によると、その数年前から生徒指導上の諸問題が多発しており、学校全体が落ち着かない状況であったようである。また実践初年度の平成 27 (2015) 年度後半には、重大な生徒指導事案が発生した。

しかし、この年度を含めた 4 年間の実践の結果、生徒指導上の諸問題と学業成績に関して、表 3 に示すような大きな改善が見られた。問題行動発生件数及び不登校生数減少し、逆に全国学力学習状況調査の県平均値との差がプラス方向で伸びており、明確な教育効果が示されていると言えよう。

取組の概要

ここでは、先に示した AP 植え込み法の観点から取組をまとめる。表 4 は、下の (1) ~ (10) の事項の 4 年間の推移を示したものである。

(1) 実施の形態

実施の形態とは、大きくは何らかの研究指定を受けて実践を行うトップダウン型と、そうした指定はないが学校内の少数の教員が取組を開始して、それが全校に広まるようなボトムアップ型に分けられる。

A 校の場合はトップダウン型であり、平成 26 (2014) 年度以前の学校の状況等から、2 年前から始まっていた B 県生徒指導集中対策指定校としての取組が延長されるかたちで平成 29 (2017) 年度まで続き、さらに平成 30 (2018) 年度は B

県生徒指導実践指定校としての取組を行った。

(2) 管理職のリーダーシップ

C校長の後を受けたD校長は、着任初年度から継続して、学校経営要項にあたる「グランドデザイン」(学校要覧記載)にSEL-8Sプログラムによる取組を「SSTの充実」という表現で明記している。そして、単に文書上の記載だけでなく、取組全体について強いリーダーシップを発揮して実践を指導した。後述の教職員研修での外部講師の招聘なども、こうしたリーダーシップにもとづくものである。

(3) コーディネーター的教員(推進役教員)

教育相談担当であったE教諭が2年間中心となって実践を推進した後、3年目からはF教諭が前面に出るかたちで実践が進んだ。3・4年目に、E教諭はA中学校に在席のまま国立大学教職大学院に長期研修に出ており、研修テーマはSEL-8Sプログラムの実践と直接関係するものではなかったが、F教諭をサポートするかたちで在籍校に関わっていた。

(4) SELプログラムの選定と構成

数多くあるSELプログラムの中で、初めからSEL-8Sプログラムが選定されていた。この経緯については次の(5)で述べる。

(5) 学級・学年単位の試行

表3では、当初から全学年での実施となっているが、その前の段階として次のような試行が行われていた。まずE教諭は、平成25(2013)年度のB県教育センターの研修講座でSEL-8Sプログラムについて研修を受けた。そして、自分の担任学級(3年生)で試行した後、平成26(2014)年度の3学期には1年生全体で取組んでいる。そうした試行の段階を得て、平成27(2015)年から全学年での実践となった。

(6) カリキュラム構成と評価

プログラムは行事等と関連づけた方がよいとのB県教育センター指導主事の助言を得て、当初から学年・学校行事、総合的な学習の時間、道徳の時間等と関連づけた年間指導計画が組まれていた。平成28(2016)年度のを図1～3に示

表4 A中学校の取組の概要

アンカーポイント	平成27年度 (2015年度)	平成28年度 (2016年度)	平成29年度 (2017年度)	平成30年度 (2018年度)
(1) 実施の形態	H25-27 B県中学校生徒指導集対策指定校	(左記、延長)	→	B県生徒指導実践指定校
(2) 管理職のリーダーシップ	C校長	D校長 グランドデザインに「SSTの充実」を記載	→	→
(3) コーディネーター的教員(推進役教員)	E教諭 (教育相談担当)	→	F教諭・E教諭 (教育相談担当)	→
(4) SELプログラムの選定と構成	SEL-8Sを選定 「人間関係づくりトレーニング」として設定	→	→	→
(5) 学級・学年単位の試行	全3学年で実施	→	→	→
(6) カリキュラム構成と評価	・学活(各学年7回ずつ)、学校・学年行事、総合的な学習の時間、道徳と関連づけ ・8つの社会的能力を測定(年2回)	→	→	→
(7) 取組の体制(組織作り)	生徒指導部・教育相談担当	→	→	→
(8) 教職員研修(SEL-8S関連)	・年5回(5月、6月、9月、10月、1月) ・公開授業研究会(1月)	・年4回(5月、8月、10月、1月) ・小中合同研修会(8月) ・公開授業研究会(10月)	・年3回(5月、9月、10月) ・校内授業研修(9月) ・公開授業研究会(10月)	・年3回(5月、8月、1月) ・中学校区公開授業研究会(1月)
(9) 環境づくり	・教室内に学習したポスター掲示	・学年掲示板にポスター掲示	→	→
(10) 家庭との連携	・学校だよりや学年通信、学級通信等で保護者にSSTの実施内容を随時報告 ・授業を地域公開(5月)	→	→	→

す。SEL-8Sプログラムの8つの学習領域(表2)の中の「進路」以外の7つの領域に沿って、学びが配列されている。年度ごとに小修正が加えられたが、年間指導計画の全体構造は4年間ほとんど変わっていない。

評価については、表3のような生徒の行動や生活面のデータとともに、取組による直接の効果を年間2回の生徒の自己評定で行なっている。そして、これについては、単年度内の変化とともに図4のような経年変化として確認していた。

(7) 取組の体制(組織作り)

取組は生徒指導部が担当し、その中の教育相談

	基本的な生活習慣	自己・他者への気付き	伝える	関係づくり	ストレスマネジメント	問題防止	ボランティア
5月	学級活動 「私たちの生徒規則」	総合的な学習の時間 史跡巡り				道徳 きまりの意義「人に迷惑をかけなければいいのか？」	ボランティア活動 トイレをきれいにする集い
6月		学年行事 海のつどい				道徳 正しい異性理解 「アイツ」	ボランティア活動 町内一斉掃除 薬物乱用防止キャンペーン
7月		学級活動 「聞く」と「聴く」	道徳 気持ちを伝える「半分おとな半分こども」	道徳 差別を許さない「私もいじめた一人なのに…」	総合的な学習の時間 里めぐり音頭		
7月		学級活動 自分を見つめる「1学期を振り返って」		道徳 友情「本当の友人関係とは」		学級活動 「ダメ！万引き」 学校行事 防犯教室 道徳 自主的な判断「アキラの選択」	
8月							ボランティア活動 クリーンキャンペーン 児童作品展 ちびっこ夏祭り
9月		学校行事 体育祭					
9月		道徳 広い心で「自分らしき」 自分をきたえる「ぼくの性格をつくった友人」	学級活動 「わかりやすく伝えよう」				学校行事 体育祭
10月				学級活動 「いろんな意見」			道徳 みんなのために「合唱コンクール」 ボランティア活動 かつほ祭り
10月		総合的な学習の時間 「自分発見」		道徳 差別を許さない「ある日のバッターボックス」 真の友情「雨の日の届け物」			
11月		学校行事 文化祭					学校行事 文化祭 生徒会選挙 道徳 真の国際貢献「リヤカーは海をこえて」
11月	道徳 日々の心構え「出船の位置に」	総合的な学習の時間 「自分史新聞」		道徳 心のあたたかさ「夜のくだもの屋」			学級活動 「学校でのミニボラ？」
12月		総合的な学習の時間 職業調べ				道徳 誠実な行動「裏庭のできごと」	ボランティア活動 町内一斉掃除 年末夜警パトロール
12月		学級活動 自分を見つめる「2学期を振り返って」		道徳 公德「無人スタンド」 正義「島耕作ある朝の出来事」			
1月		道徳 強い意志「目標は小刻みに」			学級活動 「ストレスマネジメントI」		ボランティア活動 町内とんど祭 新春子どもカルタ大会

図1 A校平成28(2016)年度 人間関係づくりトレーニング(1学年)年間計画

担当がコーディネーター的教員を務めるという体制が4年間維持されている。生徒指導主事もこの取組の意義をよく理解し、学校全体の取組を大局的視点から適切にリードしていた。

(8) 教職員研修

A校では教職員研修が充実しており、表4に示したように年間最低3回は実施されていた。教職員研修は、異動による新たな教職員にとって重要な意味をもつ。さらに、外部講師を呼んでの授業研修や公開授業研究会が毎年開かれていた。

(9) 環境づくり

学習した内容を示したポスターが、教室内や学年掲示板に継続して掲示された。

(10) 家庭との連携

保護者対象の学校・学年・学級通信(たより)で、随時、取組のようすが伝えられた。

考察

AP 植え込み法の観点から

A中学校では、4年間のSEL-8Sの取組によって、生徒指導上の諸問題の減少と学業成績等の上

	基本的な生活習慣	自己・他者への気付き	伝える	関係づくり	ストレスマネジメント	問題防止	ボランティア
5月	学級活動 「時間を大切に」 道徳 時と場に応じた礼儀「執行錯誤はまだ続く」	道徳 他に学ぶ姿勢「一番乗り」たけいち	総合的な学習の時間 職場体験学習	道徳 よりよい社会の実現「地下鉄で」		道徳 秩序と規律「仏の銀蔵」	ボランティア活動 トイレをきれいにする集い
6月		道徳 強い意志「わたしと部活動」	学級活動 「しぐさと態度のコミュニケーション」	道徳 育み合う友情「律子と敏子」		道徳 正しい異性理解「アイツ」	ボランティア活動 町内一斉掃除 薬物乱用防止キャンペーン
7月		学級活動 自分を見つめる「1学期を振り返って」	道徳 誠実な心「ロスタイムのつづき」			学級活動 「他人事じゃない！シンナー&覚せい剤」 学校行事 防犯教室	
8月							ボランティア活動 クリーンキャンペーン ちびっこ夏祭り 児童作品展
9月	学校行事 体育祭				学級活動 「ストレスマネジメントII」		学校行事 体育祭
			総合的な学習の時間 上級学校調べ	道徳 正義を考える「わたしのせいじゃない」 ともに生きる「迷惑とは何ぞ」			
10月				学級活動 「顔の見えないコミュニケーション」		道徳 弱さの克服「ネパールのビール」	道徳 人類愛「海と空」 ボランティア活動 かつほ祭り
11月	学校行事 文化祭						学校行事 文化祭 生徒会選挙
		道徳 目標に向かう意志「人間であることの美しさ」	総合的な学習の時間 伝統文化を学ぶ	道徳 正義感「路上に散った正義感」 人間愛「軽いやさしさ」			
		学級活動 「短所を乗り越える！」					
12月		道徳 自分を好きになる「虎」				道徳 誠実な心「タッチアウト」	ボランティア活動 町内一斉掃除 年末夜警パトロール
		学級活動 自分を見つめる「2学期を振り返って」					
1月				道徳 人間愛「少年の親切はいくらか」		道徳 弱さの克服「足袋の季節」	ボランティア活動 町内とんど祭 子どもカルタ大会
							学級活動 「地域でのボランティア」

図2 A校平成28(2016)年度 人間関係づくりトレーニング(2学年)年間計画

昇が得られた。それ以前には、生徒指導上の諸問題が多く、また取組開始の初年度には大きな案件も発生したが、それらの問題対処にとどまらず、予防開発的な取組を推進していった点に注目すべきである。こうした取組が効果を上げるために何が必要なのか、いわばSELプログラムの効果的な実践における必要十分条件は何なのかを示したものがAPであり、それに注目して実践を進めるやり方がAP植え込み法と言える。次に、APごとに実践の特徴をまとめてみる。

(1) 実施の形態については、生徒指導上の諸問題が多いという実態から、実践に関する指定が継続していた。学校全体の取組を方向づけるためには重要な意味を有していたと考えられる。これを字面だけの取組にすることなく、実践を有効にリードする上で(2)管理職のリーダーシップは大きな役割を果たしていたと言える。実践初年度の生徒指導事案は重大な出来事であったが、その再発を防ぐだけでなく、学校の教育機能を高めるために、D校長のリーダーシップは不可欠であっ

	基本的な生活習慣	自己・他者への気付き	伝える	関係づくり	ストレスマネジメント	問題防止	ボランティア
5月		総合的な学習の時間 自己体験学習 道徳 強い意志「やさしいうそ」 道徳 謙虚な心「山寺のびわの実」	総合的な学習の時間 上級学校調べ	総合的な学習の時間 自己体験学習		道徳 きまりの意義「一粒のアメ」 道徳 精神「元さんと二通の手紙」	ボランティア活動 トイレをきれいにする集い 総合的な学習の時間 自己体験学習 学級活動 「最高学年になって」
6月			学級活動 「上手な教え方」	道徳 友情「ライバル」 道徳 正義「卒業文集最後の二行」			ボランティア活動 町内一斉掃除 薬物乱用防止キャンペーン
7月	道徳 礼儀「おはようございます」 生活習慣「りんごの何を食べるのか」	学級活動 自分を見つめる「1学期を振り返って」				学校行事 防犯教室 学級活動 「タバコってカッコいい？」	
8月							ボランティア活動 クリーンキャンペーン ちびっこ夏祭り 児童作品展
9月	学級活動 「状況に応じたあいさつ」		学校行事 体育祭 総合的な学習の時間 自分を振り返る			道徳 弱さの克服「二人の弟子」 法の遵守「ワールドカップ」	学校行事 体育祭
10月				道徳 思いやり「月明かりで見送った夜汽車」 学級活動 「携帯電話のマナー」		道徳 人間の気高さ「高砂丸とボトマック川のこと」	ボランティア活動 かつほ祭り
11月			学校行事 文化祭	道徳 社会連帯「原稿用紙」 学級活動 「男らしさ・女らしさ」		道徳 弱さの克服「ひまわり」	学校行事 文化祭
12月		総合的な学習の時間 自己実現に向けて 学級活動 自分を見つめる「2学期を振り返って」				道徳 異性理解「アイツの進路選択」	ボランティア活動 町内一斉掃除
1月		学級活動 「“私”への思い」		道徳 正義「自由の意味」		道徳 自主自律「ウサギ」	

図3 A校平成28(2016)年度 人間関係づくりトレーニング(3学年)年間計画

たとえられる。そして、その校長のリーダーシップの下で実践を推進する起点となったのが、(3) コーディネーター的教員である。4年間の間に、その役割と職務として研修会の企画と実施、年間計画の立案・実施状況確認・調整、アンケート実施の企画と回答の整理・活用・保管、校内の関係委員会の運営および管理職への報告等がE教諭からF教諭へと適切に継承されていた。実は令和元(2019)年度は2人とも異動でA校を離れているが、次のリーダーが実践の実務を引き

継ぎ、さらに実践を発展させる方向での働きをしている。こうしたリーダーの継承は、公立学校での教職員の異動を考えると重要な課題と言える。また、これらのリーダーの動きを支援し、学校全体での円滑な実践を推進するうえで、(7) 取組の体制としての生徒指導部の働きは重要である。A校では、その要である生徒指導主事が平成26(2014)年度から変わっておらず、表面には出てこない取組の基盤としてその存在は重要な意味をもつ。

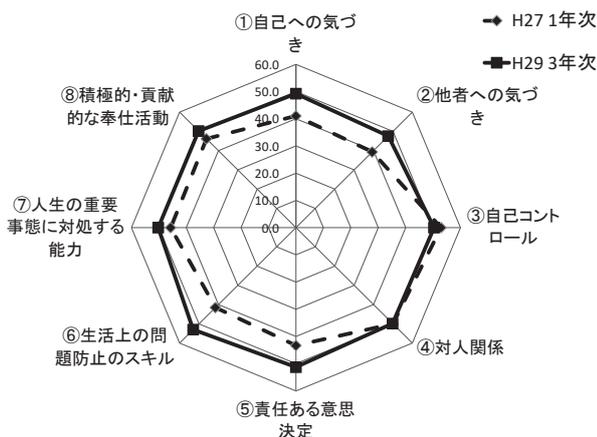


図4 社会的能力の自己評定の2年間の変化(平成27年度入学生の平均値)

(4) SELプログラムの選定と構成については、(5) 学級・学年単位での試行とも関連して、初代コーディネーター的教員であるE教諭の果たした役割が大きい。学校外での研修をきっかけに自らの学級や所属学年で試行し、それをもとに初年度から全3学年での実施に至ることができたと考えられる。そして、(6) カリキュラム構成と評価については、初年度から既存の教育課程にSEL-8Sプログラムを有機的に組み込み、教科横断的な意味合いの強い実施計画になっていた。また、評価も社会的能力の自己評価と実際の学校生活の実態の両面を記録しており、PDCAサイクルが適切に機能していたと考えられる。

また、A校の実践で重要なAPの一つが、(8) 教職員研修である。年間3回は確実に実施されるとともに、毎年公開授業研究会が開かれており、それを中心に教職員のSEL-8Sプログラムへの関与の高まりと実践意欲の維持、そして指導技術の向上が図られたと考えられる。こうした研修機会の充実なしでは、SELプログラムの実施と継続は難しくなる。

(9) 環境づくりは、学級や学年掲示板でのポスター張りが継続して行われた。こうした環境は、教科ごとに教師が変わるという中学校では、生徒のみならず指導者である教師の意識づけにも有効であったと推測される。最後に(10) 家庭との連携は、おもに各種通信で保護者への周知が行われていた。中学生という発達段階の難しさがあるが、家庭や保護者の視点を重視することを忘れてはいけない。なお、小学校段階の特に低学年では、この家庭との連携はより重要な意味をもつのではないかと推測される。

まとめと今後の課題

中学校でのSELプログラムの実践では、今回検討した10のAPはほぼ適切であったと考えられる。もちろん、A中学校の教育効果の向上には、日常の教科指導を始め、校長のグランドデザインに示された種々の取組が影響している。しかし、その基盤を成す生徒の社会的能力の形成なしでは、今回のような教育成果を上げることは難しかったのではないかと考えられる。こうした状況は、海外でも同様に言われている(例: Elias et al., 1997)。

今後の課題は、小学校および中学校が連携しての中学校ブロックでの複数年度にわたる実践事例について、AP植え込み法の観点から検討を行うことである。また、複数のAPの中で、順序や重要性の点で特に留意すべき点があるとすれば、第1次AP、第2次APや、プライマリーAP、セカンダリーAPの区分を明確にしていくことである。

引用文献

- Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning. (2012). *2013 CASEL guide: Effective social and emotional learning programs, preschool and elementary school edition*. Chicago, IL: Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning.
- Elias, M. J., Zins, J. E., Weissberg, R. P., Frey, K., Greenberg, M. T., Haynes, N. M., Kessler, R., Schwab-Stone, M. E., & Shriver, T. P. (1997). *Promoting social and emotional learning: Guidelines for educators*. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development. (小泉令三(編訳)(1999). 社会性と感情の教育-教育者のためのガイドライン 39 - 北大路書房)
- Koizumi, R. (2000). Anchor points in transitions to a new school environment. *Journal of Primary Prevention, 20*, 175-187.
- 小泉令三(2011). 子どもの人間関係能力を育てるSEL-8S 1 - 社会性と情動の学習 <SEL-8S> の導入と実践 - ミネルヴァ書房
- 小泉令三(2016). 社会性と情動の学習(SEL)の実施と持続に向けて-アンカーポイント植え込み法の適用 - 教育心理学年報, 55, 203-217.
- 小泉令三・山田洋平(2011). 子どもの人間関係能力を育てるSEL-8S 3 - 社会性と情動の学習 <SEL-8S> の進め方 - ミネルヴァ書房